プロジェクト名	消化管腫瘍に対する高精度内視鏡診断・低侵襲治療・病理分子診断を統合した地域発信型がん医療基盤の構築
代　表　者	光学医療診療部　部長（准教授）　柴垣 広太郎
達成に資するＳＤＧｓ 目標	3、9、10、17
プロジェクトの意義、成果及び波及効果	本プロジェクトは、消化管腫瘍を対象として、①画像強調・拡大内視鏡による高精度診断、②内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)などの低侵襲治療と術後偶発症予防、③病理組織診断・免疫組織化学・分子解析による腫瘍発生基盤の解明を統合的に推進し、地方医療圏から発信する持続可能ながん医療モデルの構築を目指す。 **SDG3**：消化管腫瘍の早期発見、適切な治療選択、低侵襲治療、治療後偶発症の低減を通じて、患者の身体的負担を軽減し、がん診療の質と安全性の向上に貢献する。特に高齢者や抗血栓薬内服者など、合併症リスクの高い患者に対して安全な内視鏡診療を提供するための臨床的根拠を創出する。 **SDG9**：内視鏡画像診断、低侵襲内視鏡治療、術後偶発症対策、病理・分子解析を基盤に、消化管がん診療の精度と安全性を高める技術開発を進める。各課題で得られた知見を診断・治療技術の改良に還元し、地域医療圏から消化管がん診療の技術革新につながる臨床的エビデンスを発信する。 **SDG10**：高度な内視鏡診断・治療や専門的病理診断は施設間格差が生じやすい。本プロジェクトでは、診断基準、治療適応、安全管理、病理評価を標準化し、地方医療圏においても質の高い消化管がん診療を継続的に提供できる体制を強化する。 **SDG17**：内視鏡医、病理医、分子解析研究者、学内他部門、学外共同研究施設が連携し、症例集積、中央病理評価、データ解析、論文化まで一体的に進める。多職種・多施設連携を通じて、単施設研究では得にくい外部妥当性と継続性を備えた研究体制を形成する。 本プロジェクトでは、すでにデータ集積および解析が進行している研究課題を中心に構成し、短期間での論文化が可能な研究基盤を活用する。成果として、令和 9 年 12 月までに、食道 ESD 後狭窄予防、難治性食道狭窄治療、*Helicobacter pylori* 未感染胃腫瘍の病理分子解析、胃癌範囲診断、胃 ESD 後縫縮、十二指腸腫瘍の内視鏡治療に関する WoS 論文 7 編の創出を目標とする。これらの成果は、内視鏡診断の標準化、低侵襲治療の安全性向上、病理・分子診断との連携強化、地域医療における高度がん診療体制の維持に波及する。さらに、研究成果の国際発信、若手医師・研究者の論文創出能力の向上、ならびに消化器内視鏡・病理診断・分子解析を横断する本学を中核とした研究基盤の強化を通じて、外部資金獲得や多施設共同研究への発展につなげる。